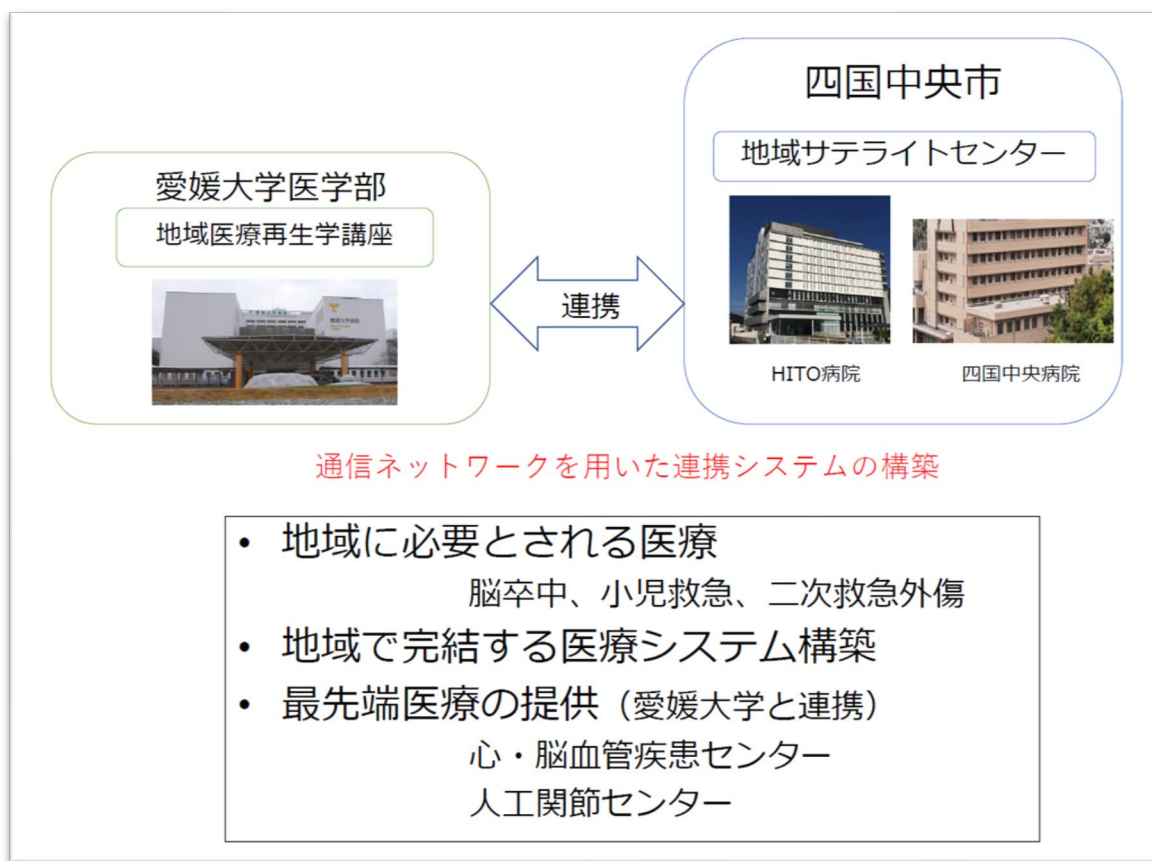


地域医療再生学講座 令和5年度活動報告

間島 直彦（地域医療再生学講座 主任教授）

愛媛大学大学院医学系研究科 地域医療再生学講座は、四国中央市が抱える地域医療の課題（医師不足、救急医療）に取り組むために、平成22（2010）年4月に愛媛県の寄附講座として愛媛大学医学部に設置されました。平成28（2016）年4月からは四国中央市の寄附講座として継続しています。

令和5年度は、整形外科は間島直彦（2014～）、小児科は新野亮治助教（2023～）、脳神経外科は中村和助教（2022～）日下部公資助教（2023～）の4名のスタッフが、四国中央病院とHITO病院内に設置されたサテライトセンターを中心に活動しました。それぞれの専門性を活かした診療、教育、研究とともに、市民の健康増進に向けて様々な取り組みを実践しています。ここでは、各分野の活動について報告させていただきます。



間島直彦 教授



中村和 助教



日下部公資 助教



新野亮治 助教

地域医療再生学講座 整形外科の活動報告

HITO 病院 整形外科・人工関節センター

間島直彦

整形外科分野では、四国中央市の救急外傷、関節疾患、高齢者骨脆弱性骨折の診療活動に加え、骨・関節・筋肉などの運動器疾患に関する地域住民の健康増進活動に取り組みました。

HITO 病院サテライトセンターに設置した人工関節センターでは、愛媛大学と連携して最先端医療を提供できる体制を提供しています。院内骨バンクも新たに構築し、再手術症例など難症例に対する体制も整えました。手術件数は順調に伸び本年も 100 症例を超えています。臨床研究としては、人工関節手術後にロボットリハビリテーションを積極的に推進して、患者の早期退院や良好な機能回復を目指しその結果を報告しています。また今年「ひざと股関節の痛みとその治療について」として市民健康講座を開催することができました。

講座では、市内すべての整形外科医療施設と協力して四国中央市における高齢者骨脆弱性骨折の二次骨折予防に取り組んでいます。具体的には、積極的に骨粗しょう症治療の連携を行い、地域住民の骨折を減少させようとする活動です。本年度は、骨に対する健康意識向上のために世界保健機関の世界骨粗鬆デーに合わせて、骨粗鬆症市民公開講座を開催して 210 名の参加がありました。

教育面においては、愛媛県の地域医療医師確保奨学生が、関連病院における研修として四国中央病院や HITO 病院に派遣されています。サテライトセンターでは、各病院と協力しながらの若手医師の育成に取り組んでいます。

四国中央市の関係者の方々に講座の活動を知っていただく機会として、令和 6 年（2024 年）2 月に活動報告会を開催する予定としております。地域医療再生学講座は、専門医による専門医療を提供するだけでなく、四国中央市における子供たちの健やかな成長や高齢者の健康維持に役立つ活動を継続しています。これからもご協力やご指導を宜しくお願い申し上げます。



骨粗鬆症市民公開講座「骨粗鬆症による骨折をなくそう」 2023. 10. 21.

地域医療再生学講座 小児科の活動報告

四国中央病院 小児科

新野亮治（助教）

小児科部門についての報告です。四国中央病院では小児科、新生児診療、小児保健事業（予防接種や健診）を提供しています。専門外来では、小児循環器部門で地域の学校心臓健診で 2 次健診が必要な児童の精査を行い、川崎病の児童のフォローアップや心臓関連の紹介を受けていま

す。小児内分泌外来では、肥満、低身長、ホルモン異常の児童の診療を行っています。また、病院の特徴として、小児リハビリテーションがあり、発達遅滞や自閉症などの児童に対して、小児科医、看護師、リハビリテーション技師と連携して対応しています。

救急医療においては自治体の垣根を超えた東予東部の2次救急輪番体制を整備し、県立新居浜病院、西条中央病院と連携してその役割を担っています。また1次救急においても新居浜市や西条と連携した体制が整備され、新居浜市急患センターの救急診療にも従事しています。

研究面では、愛媛大学医学部と連携してコロナ感染期における1.6か月検診における小児の成長発達の遅れについての研究を行っています。

地域連携としては、宇摩小児科医会として開業医の先生方と2か月に1回程度の会合を開催し、症例発表や地域の問題について話し合っています。

教育面では、HITO 病院や愛媛大学からの若手医師を受け入れ小児科研修を行っています。市民向けの公開講座では、子供の心に焦点を当て、地域住民とのコミュニケーションや正しい知識の普及に取り組んでいます。

これらの取り組みを通じて、地域住民とのネットワークを強化し、拠点病院としての役割を果たすことを目指しています。

地域医療再生学講座 脳神経外科の活動報告

HITO 病院 脳神経外科

日下部公資（助教）

中村和（助教）

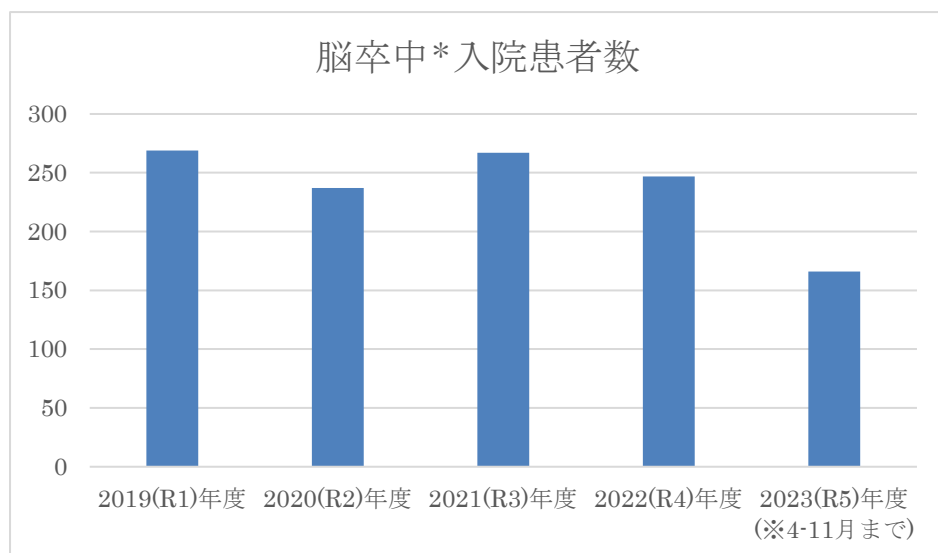
HITO 病院では令和3年度よりSCU(Stroke Care Unit：脳卒中ケアユニット)を開設いたしました。SCUは脳卒中診療医を常時配置する必要があることから、本年度も当講座からは2名の脳神経外科を配属し、24時間365日の脳卒中診療維持に努めております。2024年4月からは医師の働き方改革新制度も施行される状況の中で、質の高い医療を継続的に提供できるよう、常勤医師ならびにコメディカルスタッフと協力して診療にあたっております。

当院では宇摩地区のみならず、徳島県三好市や香川県三観地区など県外一部の地域からの救急搬送も積極的に受け入れており、これらの人口を合わせると約20万人の医療圏になります。コロナ禍により多くの病院が機能不全に陥り地域での診療に制限がかかる中で、当院でも急性期病棟の一部がコロナ専用になりましたが、脳卒中診療は大きな支障をきたす事なく行えました。コロナ禍中も、年間250人前後の脳卒中入院患者の受け入れや、30-50件程度の血管内治療を実施、継続ができました（下図）。これはSCU開設の大きな成果と考えています。

脳血管疾患は本邦における死因の第4位、介護が必要となる原因疾患の第1位に位置している重要な疾患であり、特に医療・介護の人手不足が深刻な地方においては、診療体制の整備や地域住民への啓蒙活動が重要な分野です。治療転帰を改善させるための有力な選択肢としては、脳梗塞に対する超急性期治療が挙げられます。治療の対象となり得るケースを逃さないよう、主幹動脈閉塞予測スケールを救急隊と共有し、これを満たす症例については神経系医師が迅速に対応する体制をとっております。超急性期治療に対するニーズは年々高まっており、地域でも遅れを取らないよう今後も努めてまいります。

また、当院における特徴として、スマートフォン端末を用いた遠隔情報共有があります。コメディカルスタッフとの連携において極めて有用なツールであり、労働環境の改善に一役買っています。さらに、前述の脳梗塞については、超急性期治療においても途切れなく提供する必要があり、

状況に応じて遠隔の専門医の監督の下、専門的治療の実施を展開しております。



*脳卒中：脳梗塞、脳出血、くも膜下出血

